

修辞的効果をもつ結果構文

江口, 巧
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/1932335>

出版情報 : 英語英文学論叢. 68, pp.49-70, 2018-03-12. Department of English, Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



修辭的効果をもつ結果構文

江口 巧

1. 序

英語には、概して「主語の行う行為により、目的語で表される事物・人に変化が生じる結果となる」と定義される結果構文が存在する。この結果構文は、以下に見られるように、様々なタイプが存在する。

- (1) She wiped the table clean.
- (2) He hammered the metal flat.
- (3) She danced her feet sore.
- (4) He coughed himself out of sleep.

(1)と(2)においては、主動詞の意味から、目的語と結果述語が描写する事象はある程度予測される。一方、(3)、(4)においては、用いられている主動詞が本来自動詞ということもあり、同様の事象は予測がつきにくい。しかし、これら(1)-(4)の結果構文に描かれている事象は、日常においてしばしば繰り返される出来事を描いており、また、この構文のある程度の生産性もあって、母語話者にも比較的受け入れやすい類のものである。

では、以下のような結果構文についてはどうであろうか。

- (5) You may sleep it [=the unborn baby] quiet again ...
(Levin and Rappaport Hovav (1995: 36))
- (6) Sleep your wrinkles away. (ibid.)
- (7) Drive your engine clean. (ibid.: 37)

(5)で用いられている主動詞はやはり自動詞であり、ここでは、おなかに赤ん坊がいる女性に対し、「あなたが眠れば(今動いている)おなかの中の赤ん坊もまたおとなしくなるかもしれませんよ」と伝えている。結

果構文はタイプによって、英語母語話者の間でも容認性に大きな揺れがあるとされ、また同時に斬新な内容の命題をも容認することのある構文であるため、時に日常的にまれな状況がこの構文に描かれることもあるが、(5)のような文を目にすると、文体的効果とも言うべき何らかの修辞性を感じる。そして、この効果は(6)、(7)においてさらに増すように思われる。(6)は、それを顔に塗って眠ることでしわが取れることを謳った化粧品の広告であり、同様に(7)は、ガソリンの広告で、そのガソリンを入れて車を走らせればエンジンがきれいになるという内容を伝えている。どちらも広告の宣伝文句ということ在意図してか、命令形の形で表れており、内容・形式双方の面で非常に新鮮味が感じられる。

本稿では、(5)-(7)のタイプの結果構文、つまり構文の目的語および結果述語で表される結果事象が主動詞の意味から予測がつきにくいタイプの結果構文において、上述したような修辞的效果が表れる要因を探ることをねらいとする。結果構文を修辞的観点から分析した先行研究は多くはないが、その中で木原(2013)は、結果構文において修辞性が生じるメカニズムを論じている。しかし、木原の提示する見解は、理論のごく大まかな枠組みを述べているにすぎないという印象がぬぐえず、理論にさらなる精緻さが求められる。本稿では、木原の理論の不足を補うべく、(5)-(7)のタイプの結果構文において認められる修辞的效果を、より具体的かつ体系的に説明することを目指す。

本稿では、まず2節で、修辞性の観点から結果構文を論じた木原(2013)の分析を取り上げ、その問題点を論じる。3節では、結果構文の修辞性を論じる際の議論の前提となるべく、結果構文の分類に有益な基準を提供した影山(2005b, 2007)、都築(2007)、鈴木(2007)を概観し、それらの見解を統合した結果構文の新たな分類を提示する。4節では、3節で提示された分析を踏まえて、(5)-(7)のタイプの結果構文に修辞的效果の生じる要因およびそのプロセスに対し、明示的な説明を施す。5節は結論である。なお、本稿の目的とする結果構文の修辞的效果については、江口(2012)において言及がなされてはいるものの、ここでは示唆にとどまっており、これに対し、本稿は修辞的效果を主眼においた議論を行うものである。

2. 結果構文の修辭性に関する先行研究—木原（2013）

本節では、結果構文を修辭性の観点から分析した木原（2013）を取り上げ、その見解を概観した上で、問題点を指摘する。

木原は結果構文に修辭性が生じる要因を説明するために、以下のような結果構文の例を挙げている。

- (8) a. The joggers ran the pavement thin. (Randall (1982: 86))
 b. They drank the pub dry.
- (9) a. You may sleep it [=the unborn baby] quiet again ...
 b. Sleep your wrinkles away.
 c. Drive your engine clean.

(Levin and Rappaport Hovav (1995: 36-37))

これらの結果構文の目的語として現れた名詞句は、動詞本来の目的語ではない。(8a)、(9a, b)において、主動詞 run および sleep は自動詞であり、通常目的語は必要としない。(8b)、(9c)の主動詞 drink および drive は他動詞であり、ここに現れたその目的語は主動詞の表す行為と関連のある事物ではあるが、動詞本来の目的語ではない。木原は、このように文の目的語が動詞本来のものではない、いわば、動詞と目的語の「不一致」を認識することによって、新たに結果構文として読み込み直すプロセスが生じると論じている。このように、木原にとっては、要素間の不一致の認識により、別の解釈を模索し、新たに結果構文としての解釈を連想と類推によって導き出すプロセスが修辭であり、(8)、(9)のように典型的でない結果構文は、修辭によって容認されていると考えている。

そして、木原はこのような修辭的な結果構文の解釈のプロセスに、二つの対象の間のカテゴリ的意味の不一致を認識したうえで新たな共通点を探る比喩理解のプロセスとの類似性を見出している。そして木原は、比喩の良さの判断を規定する基準として楠見（1995）の見解に倣い、i) 二つの語の間のカテゴリ的距離が大きいほど、比喩の面白さが高まり、比喩の良さが増す、その一方で、ii) 二つの語の情緒・感覺的距離が小さい（類似している）ほど理解容易性が高まり、比喩の良さが増すという見方を取っている。このことは、二つの語の距離が遠いと比喩としての斬新さ・面白さのレベルは上がるが、比喩としては理解しにくいとい

うことになり、結局、理解できる範囲でカテゴリ的距離が遠いものが良い比喩になるということの意味する。そして、このような見方を結果構文の理解にも適用し、「動詞に後続する名詞句と結果述語が表す結果が誇張的であっても、主語と動詞の表す行為との因果関係が連想・類推できるものでなければ結果構文として容認されない。現実との認識のズレはあるものの、因果関係を読み取ることができる文が面白い結果構文である」(p. 23)と述べている。

木原が行った議論は概ね上のようなものであるが、木原が結果構文の修辭的な理解に関して意図していると思われることを以下に推測して述べると、まず、問題の結果構文に関して、要素間の距離・ズレというのは、先にも触れた、構文の目的語が動詞本来のものではないという点、さらにはこのことから生じる、目的語と結果述語が表す結果状態が動詞の意味からは予測されにくいという点であると思われる。まさに、上の(8)、(9)に見られる類の結果構文であり、論文冒頭に挙げた(1)、(2)のような結果構文と対立するものである。

- (1) She wiped the table clean.
- (2) He hammered the metal flat.

一方で、これとは対照的に要素間の類似性というのは、目的語が動詞本来のものではないとはいえ、動詞と正統ではないその目的語の間には、(8b)の drink と pub、および(9c)の drive と engine のように語用論的な関連性を見て取れ、それがゆえに、動詞が表す行為とそれによってもたらされた結果状態との間には因果関係を認識することができるという点であると思われる。このズレと類似性のバランス関係、言い換えれば、動詞が表す行為と描かれた結果事象との間の因果関係がある限度内で認識されうるか否かが、この構文の容認性を決定することになる。そして、因果関係が認識されるということで容認された場合には、逆に、動詞の表す行為と結果事象との心理的距離が遠いものほど、より斬新で修辭性の高い結果構文ということになる。

木原の提示した結果構文に関する修辭的観点からの分析は、前提として主動詞と構文の目的語の一致／不一致を判断基準としており、実際に(1)や(2)のように不一致の見られない事例では修辭性が感じられず、他

方、(5)-(7)のように不一致のある結果構文では明らかに修辭性を感じ取る我々の心理感覚と合致している。

しかし、結果構文全体、特にここで取り上げている動詞と目的語に不一致がみられる類の結果構文の容認性の判断基準をすべて修辭性という概念に求めようとする、説明装置としてはかなり大まかな装置であると言わざるを得ない。例えば、以下の(10a)、(10b)ではともに、動詞と目的語は一致していないことになるが、文の容認性は違っており、この容認性の違いを動詞の意味からの因果関係の推論のしやすさという所に求めると、修辭性に依存した説明装置にはもう一段の精密化が求められる。

- (10) a. The wise dog barked his master awake to warn him of the fire.
 b. *A stray dog in the distance barked the sleeping child awake.

(影山 (2005 a: 131))

また同様に、以下の(11)においては、文の容認性の違いは、明らかに結果述語の統語形式の違いによるものと予想されるが、因果関係の認識のしやすさという、いわば認知語用論的観点から文の容認性を判定しようとする理論では、この違いは説明できない。

- (11) John laughed himself {??exhausted/to exhaustion}.

(草山 (2001: 82))

したがって、木原の提示する修辭性に基づく理論は、動詞と目的語の一致しない結果構文に関して、行為と結果事象の因果関係から構文の容認性を説明するひとつの一般理論として機能しうるものの、文の容認性に様々な要因の絡んでくる結果構文のすべての事例を修辭性という一つ概念で処理することにはかなり無理がある。この理論の基本的なスタンスとして、動詞の表す行為と結果事象との間に因果関係が推論されれば結果構文は容認されるとしているが、どの程度のどのような因果関係であればその推論はつながるのかを定式化した形で提示しない限り、この種の問題に説得力のある説明を施すことは困難になる。修辭性や連想・類推といった、半ば定式化を拒む概念を含むこの理論の性格上やむを得

ない側面もあるが、修辞性以外の多くの要因が絡んでくる結果構文の現象に対する説明装置としては不足があることは認めざるを得ない。

最後に、上にも述べたとおり、(9a-c)については、いずれも修辞的効果の感じられる結果構文であるが、(9a)に比べ、(9b)、(9c)では、その修辞的効果の強さばかりでなく、その効果をもたらす要因についても違いがあるように感じられる。

- (9) a. You may sleep it [=the unborn baby] quiet again ...
 b. Sleep your wrinkles away.
 c. Drive your engine clean.

しかし、単に因果関係が推論・連想されるか否かを判断基準とする木原の理論では、このような(9b)、(9c)に固有の特徴がうまく説明されないことになる。

以上、木原の修辞性に基づく結果構文の分析の問題点を指摘はしたものの、我々が(8)、(9)の類の結果構文に修辞性を感じ取るのは事実であり、その容認性および修辞性の程度の判定基準を提供したという意味で、木原の分析は結果構文研究に有益な視点をもたらしたといえる。したがって、本稿では、動詞と目的語の一致しない結果構文では修辞的効果が生じることがあるという木原の基本的なスタンスは維持しつつ、それだけでは十分に説明の尽くされない結果構文の修辞的効果について、具体的かつ包括的な説明を提示することをねらいとする。

3. 結果構文の再分類

我々が結果構文で修辞性を認める過程として木原の見解を再度簡潔にまとめておくと、まず主動詞と目的語の不一致を認識し、そこで文の再解釈を模索し、動詞の表す行為と描かれた結果事象との間に因果関係を見出すというものであった。そこでは、主動詞と目的語の不一致の認識が以降のプロセスの最初のステップとなる。とするとここで生じる疑問は、動詞と目的語の不一致があると、なぜ当初行っていた解釈の軌道修正を余儀なくされるのか、そもそも当初の解釈とはどのようなものかという点である。そこで、以降ではこの問題の解決を図ることで、最終的には結果構文に生じる修辞的効果の説明を目指すことにする。

この問題の解決を目指す過程で、我々はまず、従来から取られてきた結果構文の分類方法を見直す必要がある。そこで、そのために有益な分類法を提示した影山 (2005b, 2007)、都築 (2007)、鈴木 (2007) を順に見ていき、その後、それらを踏まえ統合した形で新たな分類方法を提案する。

3.1. 影山 (2005b, 2007)

英語の結果構文の分類法として長らく主流であったのは影山 (1996) の分類である。影山は、以下の(12)、(13)のように、主動詞が状態変化を表す結果構文を「本来的結果構文」とし、一方、主動詞の意味が変化結果を含まず、変化結果が結果述語で表される(14)、(15)の類を「派生的結果構文」とした。

(12) He broke the vase into pieces.

(13) She painted the fence white.

(14) She shook her husband awake.

(15) He watered the tulips flat.

しかし、同じ派生的結果構文である(14)と(15)を比較してみると、一般的に(15)の類の結果構文では、(14)に比べ容認性が下がるとされる。そして、この容認性の違いには認知語用論的要因が関わるとされ、このことがこの問題に関する定式化した形での解決を拒んできた。しかし、影山 (2005b) は、動詞の語彙概念構造 (以降 LCS) およびクオリア構造の目的役割の概念を用いて結果構文を細分化し、様々なタイプの結果構文の容認性・生産性の違いを体系的に説明した。影山が提示した結果構文の下位分類は以下に示す通りである。

(16) 本来的結果構文 (=LCS に結果状態が含まれる)

(A) break to pieces タイプ：主動詞の LCS に変化結果が記載され、しかもその主動詞の事象タイプが transition である。

(B) wash clean タイプ：主動詞の LCS に変化結果が記載されているが、事象タイプは process である。

派生的結果構文 (=LCS には結果状態が含まれない)

- (C) wipe clean タイプ：主動詞そのものの LCS は ACT (ON) であるが、目的役割に対象物の特定の変化結果を含む。結果述語は、その目的役割に示された変化結果に対応。
- (D) shake awake タイプ：主動詞は辞書表記として目的役割を含むが、その中身は一つに特定されていないので、慣用化の範囲内で様々な結果述語が可能。
- (E) bark awake タイプ：主動詞は本来は目的役割を持っていないが、意図的な状況において何らかの目的役割がオンラインで作り上げられる。
- (F) swim the swimsuit to tatters タイプ：主動詞の行為によって偶発的に生じる結果を表す。表現の範囲が限られ、許容度も低い。
- (G) cry one's eyes out タイプ：特定の動詞・目的語・結果述語の組み合わせに限られたイディオム。誇張表現と解釈されることが多い。

この分類では「本来的 / 派生的結果構文」という基本的な枠は保持しているものの、それぞれを細分化した新たな分類を提示している。本稿での議論は、特に派生的結果構文に関する再分類が重要になってくるので、以降ではこのタイプに的を絞って説明を行っていく。

影山 (2005b, 2007) は、Pustejovsky (1995) の提示したものとは異なる独自のクオリア構造を提唱し、動詞の表す行為の果たす目的がクオリア構造の目的役割に記載されているとした。そして、状態変化が動詞の LCS に含まれない派生的結果構文 (上の C-E タイプ) については、結果述語が示す状態が動詞の目的役割に記載されているものほど容認性が高いとした。例えば、C タイプに属する wipe という動詞は、「汚れを取り除く / その場所をきれいにする」という特定の役割をもつため、wipe clean という言語化が容易に可能となる。D タイプに属する shake という動詞は、力を加えることによって対象物に何らかの変化を引き起こすことを目的としているが、意図される変化は多様であり、一つに特定できない。言い換えると、目的役割の中身は未指定 (underspecified) である。そのため、例えば shake awake は、複数の可能な「shake - 結果述語」の

組み合わせのうちの一つにすぎない。Eタイプの動詞 bark になると、通常犬が吠える行為は、対象に何か直接的な影響を与えるという目的はないので、本来目的役割をもっていないことになるが、場合によって、眠っている人間を起こす目的で吠える場合があり、そのような場合は、その場限りの動作目的がオンラインで目的役割に組み込まれる。その結果、bark awake が容認されることになる。そして、特定の目的が意図されない動詞が用いられたFタイプに至って、結果構文の容認度は、以下に示す通り、かなり低下するという（各文の容認判断は、影山がネイティブチェックを依頼したカナダ人インフォーマントの判断）。

- (17) *?She swam her swimsuit to tatters.
- (18) *The joggers ran the pavement thin.
- (19) *The chef cooked the kitchen walls black.

以上のように、影山は結果構文を、その動詞の目的役割に結果述語が表す動作の特定の目的が記載されているかによって下位分類し、記載されているCタイプから記載のないGタイプに下がるほど、結果構文は受け入れられにくいとした。これにより、上に見た(14)と(15)の容認性の違いも、Dタイプに属する shake awake に比べ、行為の目的が意図されない偶発的結果を表すFタイプの water flat では、母語話者間で容認性にかなりの揺れがあることが明晰に説明される。

3.2. 都築 (2007)

都築 (2007) も上述した影山 (2005b) の議論を受け、結果構文の容認性にかかわる意図性・目的といった概念の重要性を示唆している。都築は影山の提示した結果構文の下位分類のうち、派生的結果構文のC-Eタイプについては、動作主の意図・目的が関わるとしてプラス型とし、そうではないマイナス型のF、Gタイプと区別している。そして、プラス型では、使役行為は結果述語の表す結果状態の達成を目的として、対象物に意図的に直接的な働きかけを行う行為であるとし、派生的結果構文のプロトタイプをなすと述べている。一方、マイナス型に関しては、「意図性という特性が落ち、単なる因果関係を表す使役行為を表すものへと拡張していったと思われる。その分、以下に示されるように、病気

になるとか、靴が擦り切れるなど通常のデフォルト状態からの離脱というような ... 行為に限定されていると思われる」(p. 157) と述べている。

(20) John drank himself sick.

(21) John ran his Nikes threadbare.

3.3. 鈴木 (2007)

鈴木 (2007) は結果構文のアスペクトを論じた論考であるが、その中で、「AP (= 形容詞) 結果句に関しては ... 非選択性結果構文では ... 機能不全解釈のもとで、主に否定的含意を持つものに限定されている」(p. 132) と述べている。鈴木が挙げた例は以下のようなものである。

(22) She sang herself hoarse.

(23) He danced himself tired.

(24) We laughed ourselves {sick/silly/senseless}.

ここでいう「機能不全」とは「身体機能の正常な状態からの否定的な方向への逸脱」(p. 120) のことであり、その主旨は概ね都築のいう「通常のデフォルト状態からの離脱」に類似したものであると思われる。なお鈴木は、この類の結果構文にはやはり意図性の有無が関わってくることを示唆する言及をしている点が注目される。

なお、鈴木が議論の中で用いた「非選択性結果構文」というのは、本稿で既に述べてきた、動詞直後の名詞句が主動詞本来の目的語ではない類の結果構文 (例：(22)-(24)) のことであり、これは以下のような「選択性結果構文」と対立する。例文の目的語は、いずれも動詞本来の目的語である。

(25) He hammered the metal flat.

(26) He kicked the door {open/shut}.

この「選択性／非選択性」という概念は、本来は統語論の用語で、「目的語が動詞の項 (argument) であるか否か」と定義される。今後、本稿では、構文の目的語が動詞の項であるか否かによって結果構文を二つに区

分した Wechsler (2005) に倣い、前者を「control 結果構文」、後者を「ECM (= exceptional case marking) 結果構文」と呼ぶことにする。またこれに伴い、おのおのの結果構文に現れる動詞をそれぞれ「control 動詞」、「ECM 動詞」と呼ぶことにする。

以上のように、鈴木の見解で注目されるのは、結果構文の分類において目的語が動詞の項であるかどうかという統語的な視点を取り入れ、しかも、その分類には行為の意図の有無が関わってくるという示唆をしていることである。

3.4. 新たな分類

以上、三名の学者の提示した結果構文の分類を概観した。影山 (2005b, 2007) は、行為者の行為目的の有無によって結果構文の容認性が段階的に変化することを体系的に示し、都築 (2007) も同様の主旨で結果構文を分類し、行為意図の関与しない使役行為は単なる因果関係を表すことになり、しばしば通常のデフォルト状態から逸脱した結果を表す旨を述べていた。鈴木 (2007) は、結果構文の分類に目的語が動詞の項であるか否かという統語的な視点を取り込んでいた。ここでは、これら三者の見解を踏まえ、それらを統合した形で新たな結果構文の分類を提案する。なお、この分類はやはり派生的結果構文に限定したものとする。

提案される新たな分類は、基本的には影山 (2005b) のそれに従うものとする。そしてそこに、タイプによって通常の状態を脱した結果が生じるとする都築や鈴木の見解を取り入れる。ただし、影山の分類には統語的な要素が欠けているため、鈴木の統語的視点を取り込む。それによって、都築の指摘した上位にランクする結果構文における「対象物への直接的な働きかけ」という側面がうまく説明されることになる。

概略上のような図式に従うと、まず、動詞で表される行為が、結果述語に示された変化結果をもたらす意図で遂行されるかどうかによって C から G タイプまでが配列される。個々の分類基準も概ね影山の見解に従う。C、D タイプについては、行われる行為が特定の目的を意図する程度によって分類されるが、いずれにせよ、話し手の意図が絡むので、この二つのタイプで表れる動詞は control 動詞、つまり目的語を項として選択する動詞である。このような場合、表される事象は、概して、動作主が行為の対象となる事物・人に対して直接的に働きかけを行うという事

象である。そしてこの際、都築が西村（1998）を引用して述べているように、「行為者（人間）は行為対象に（位置・状態などにおける）何らかの変化を生じさせることを目標としている」。このように、一般的に control 動詞は、行為者の意図、そしてそれに伴う行為目的の概念と結びつきやすい。そして C、D タイプでは、結果述語の表す変化結果は動詞の目的役割に記載されている可能性が高く、結果構文としての容認性も上がる。

一方、F タイプについても影山の見解と同様に、話し手の意図の絡まない行為を表すものとして分類する。このタイプに分類される結果構文は以下のようなものである。

- (27) John cooked the pan black. (中村 (2004: 13))
 (28) The joggers ran the pavement thin. (Randall (1982: 86))
 (29) John sneezed the napkin off. (中村 (2004: 13))

ここでは、遂行される行為は変化結果をもたらすことを意図して行われるわけではない。統語的には、このタイプの動詞はほとんどが ECM タイプである（water the tulips flat は control 動詞で、まれな例外である）。つまり、動詞は後続する名詞句を選択していないため、この統語的側面が意味にも反映され、動詞の表す行為は目的語で表される対象に直接的に働きかけるものではない。その結果、このタイプの結果構文では、当初の意図になかった偶発的な結果を表すことになる。そしてこのような場合、デフォルトから逸脱した状態や機能不全などの否定的な結果を表すケースが多くなる（cf. 江口 (2012)）。このような場合、変化結果は動詞の目的役割に記載されておらず、母語話者の間での文の容認性に対する判断は大きな揺れがある。G タイプは、特定の動詞・目的語・結果述語の組み合わせに限られたイディオムであり、やはり、動作主の意図は介在しないと言ってよく、現れる動詞は ECM タイプである。

さて、残った E タイプであるが、影山はこのタイプを、「主動詞は本来は目的役割を持っていないが、意図的な状況で何らかの目的役割がオンラインで作り上げられる」とした。本稿でもこの立場をとるが、このカテゴリに属する結果構文としては、以下のようなものが考えられる。

- (30) She frightened an admission out of him. (中村 (2004: 31))
 (31) She kissed the anxiety away from him. (ibid.)
 (32) The salesperson knocked the gun from the mugger's hand.
 (影山 (2005a: 115))

ここに描かれているのは、行為者が、動詞によって本来選択されない対象に対し、何らかの影響を及ぼす目的をもって行為を遂行している状況である。ただし、通常は、結果述語に示された変化結果はこれらの動詞の目的役割に記載されているとは言えず、その意味で、その場限りで目的役割が作り上げられると言ってよいであろう。(30)は、「彼女は彼を脅して事実を認めさせた」、(31)は、「彼女は彼にキスをしてその不安を取り除いてやった」、(32)は「その販売員は強盗を殴って、その手から銃を叩き落とした」という意味である。このタイプで用いられている動詞のほとんどはECM動詞である。ECM動詞は目的語を選択しないので、ここでも動作主の行う行為は目的語で示されるものを直接的な対象として行われているわけではない。行為が直接向けられた対象は、(30)、(31)では「彼」、(32)では「強盗」である。しかし、それでいて、目的語で表されたものにも何らかの変化を及ぼす意図で行為が行われている点で興味深いものがある。

以上の議論で提示された結果構文の新たな分類を以下に簡潔にまとめてみる。この分類では、ベースは影山 (2005b) に基づくものの、動詞の統語情報が加わっている点と、Eの表現例がfrighten an admission out ofに入れ替わった点が影山の分類からの修正点である。

- (33) (C) wipe clean タイプ：主動詞そのもののLCSはACT(ON)であるが、目的役割に対象物の特定の変化結果を含む。結果述語は、その目的役割に示された変化結果に対応。主動詞は主にcontrolタイプ。
 (D) shake awake タイプ：主動詞は辞書表記として目的役割を含むが、その中身は一つに特定されていないので、慣用化の範囲内で様々な結果述語が可能。主動詞は主にcontrolタイプ。
 (E) frighten an admission out of タイプ：主動詞は本来目的役割

を持っていないが、意図的な状況において何らかの目的役割がオンラインで作り上げられる。主動詞は主に ECM タイプ。

- (F) swim the swimsuit to tatters タイプ：主動詞の行為によって偶発的に生じる結果を表す。表現の範囲が限られ、許容度も低い。主動詞は主に ECM タイプ。
- (G) cry one's eyes out タイプ：特定の動詞・目的語・結果述語の組み合わせに限られたイディオム。誇張表現と解釈されることが多い。主動詞は主に ECM タイプ。

この分類を見てまず気づくのは、動詞の表す行為が結果述語に示される変化結果をもたらす意図で遂行されるか否かという点と、動詞の統語タイプとの間にほぼ明確な相関関係があるという点である。行為の意図がある場合は対象に対する直接的な働きかけがあり、動詞は control タイプになる傾向があるのに対し、意図がない場合は直接的な働きかけがなく、偶発的な結果が表され、動詞は ECM タイプとなるケースが多いという全般的傾向である。ただし、この傾向に唯一反するのが E タイプであり、このタイプでは、動詞は ECM タイプでありながら、行為が対象に対して、直接的な働きかけではないにせよ、何らかの状態変化を引き起こす意図を持って遂行されている。

4. 結果構文における修辞性

前節では、動詞の表す行為の意図の有無と動詞の統語タイプを絡めた結果構文の再分類を提案した。これに基づいて、本節では、本稿の目的である、結果構文における修辞性を明晰な言葉で説明することを目指す。

木原（2013）は、派生的結果構文では、動詞と目的語の不一致を認識することにより再解釈を模索し、行為と結果の間の因果関係を類推して、新たに結果構文として読み込むプロセスがあると論じていた。そして、これに関して3節で提示された疑問は、動詞と目的語の不一致を認識すると、なぜ当初行っていた解釈の軌道修正を余儀なくされるのかという問題であった。まず、この問いに対し、前節での議論を踏まえて回答を与える。なお、ここでいう「動詞と目的語の不一致」のケースというのは、これまでの議論を受けて、「目的語が動詞の項でない」場合とし

ておく。

まず、我々は文を解説していく際、主動詞が他動詞であると、一般的な他動性 (transitivity) の原則から、(典型的には) 動作主は、その直後にある目的語で表された対象に対し、何らかの影響を及ぼす意図をもって直接的な働きかけの行為を行なうと予測する。そして、実際に直後の目的語名詞句が動詞の項であると、そのまま解釈は進むが、仮に、派生的結果構文の下位のタイプにおいてそうであるように、主動詞が直後に目的語名詞句があるにもかかわらず、自動詞であると、先ほどの予測が成立しない (例 (34))。また、仮に主動詞が他動詞であっても、その直後の目的語名詞が動詞の項でないと、やはり上述した当初の予測があるために、表されている事象は、対象に影響をもたらす意図で直接的に働きかけた行為ではないという方向に軌道修正せざるをえなくなる (例 (35))。

(34) The joggers ran the pavement thin.

(35) John shaved his razor dull.

このように、木原が、「動詞と目的語の不一致の認識」とした現象は、言葉を換えれば、他動性の原則から導かれる、動詞と直後の名詞句の意味関係の認識の再調整ということになる。つまり、動詞と目的語の意味関係が、他動性が予測するものとは異なる方向、すなわち、動詞の表す行為が対象に状態変化を引き起こす意図をもって行われた「直接的な働きかけ」ではないと認識されることである。そしてこの認識が、以降の解説で結果構文への再読み込みが行われるステップの第1段階となるのである。

次に、動詞と目的語の意味関係の認識の再調整が行われた後、文が結果構文として再解釈される過程を、本稿の冒頭で挙げた以下の結果構文を取り上げて説明していく。

(5) You may sleep it [=the unborn baby] quiet again ...

先ほどの議論を再度引用すると、ここでは主動詞 sleep が自動詞であるため、直後の名詞は動詞の項とならないため、他動性の原則により直接

的な働きかけはないという方向に軌道修正されることになる。すなわち、読み手は通常他動文（形式的には「動詞＋目的語」の連鎖で、動詞が目的語に直接的な働きかけを行う事象を描いた文）ではないと判断し、目的語以下にある要素の解説に取り組む。その結果、文に描かれている二つの事象、つまり、母親が眠ることとおなかの赤ん坊が静かになることとの間に因果関係のあることを推論により導き出す。言い換えれば、母親にそれを生じさせる直接的な意図はないにせよ、母親が眠ることが引き金となり、おなかの中の赤ん坊が静かになるという使役状態変化の関係を見出す。これによって、新たに結果構文としての再読み込みが成立する。そして、このような一連の過程で修辞性が生じるということができよう。

同様に、今度は主動詞が他動詞である(35)を例にとって考えてみると、目的語の his razor は他動詞の直後に来ていながらその項ではないことが認識され、この文では、ジョンが髭を剃る行為が剃刀に直接働きかけた事象を描いたものでなく、髭を何度も剃る行為により偶発的に剃刀の切れ味が落ちたという二つの事象間の因果関係が推論されることになる。

さて、今上に述べた修辞性が生じるまでの過程の中で述べた「他動性の読みの修正」それ自体から修辞性が生じるわけではないことに注意されたい。修辞性そのものの有無およびその程度を決定する重要な要因として見落としてならないのは、他動性の読みが修正され、文の次の要素の解説を再開した時点で認識される、主語＋動詞で表される行為の事象と目的語＋結果述語で表される変化結果の事象との間に感じ取られる心理的距離である。例えば(5)に関して述べると、母親が眠り、その結果としておなかの赤ん坊がおとなしくなるという一連の事象は、通常は容易に想像しやすいものではなく、従って、その因果関係はつながりやすいとは言えない。ここで、日常一般に生じるさまざまな事象について我々が抱く認識の総体をシナリオと呼ぶとすると、今挙げた二つの事象の関連性はこのシナリオからは容易に導き出せない。その意味で、この二つの事象の間の心理的距離は遠いということになる。そして、このような事象を描いた結果構文こそが、容認性は下がるかもしれないが、その遠さゆえに斬新な内容を描いているとして修辞性は増すということになる。これが、木原の言う「誇張的ではあるが、面白い結果構文」である。この意味では、上に挙げた(31)、(34)も同様に、それぞれ「キスをして

彼から不安を取り除く]、「ジョギングをする人たちが繰り返しこの道路を走ることによって舗装が薄くなる」という命題内容から判断して、描かれた二つの事象の関連性はシナリオからは想像しにくい、それらを因果関係のあるものとして関連付けた結果構文としての修辭性は高いといえる。

(31) She kissed the anxiety away from him.

(34) The joggers ran the pavement thin.

今これらを、本稿の冒頭にあげた二つの派生的結果構文と比較してみよう。

(3) She danced her feet sore.

(4) He coughed himself out of sleep.

これら二つの派生的結果構文（本稿の分類ではFタイプ）に描かれた行為事象と結果事象は日常的に前後して起こりやすく、この一連の生起はシナリオに合致すると言える。それゆえ、二つの事象に因果関係を推論することは比較的容易である。このような「十分目立ち、日常でしばしば繰り返される慣習的な行為」（都築（2007: 157））は結果構文において容認されやすく、構文に比較的頻繁に現れる命題である。しかし、逆にこのような結果構文の修辭的效果は、(31)、(34)に比べると相対的に低いと言わざるを得ない。

このような観点から見てくると、総じて、ECM 結果構文で修辭性が感じられやすい理由が明らかとなってくる。つまり、control 動詞が用いられているために、変化結果が動詞の意味から予測が付きやすい control 結果構文と比べて、ECM 動詞の現れる ECM 結果構文では、行為者から対象への意図をもった直接的な働きかけがないために、生じる変化結果は動詞の意味から予測が付きにくい。従って、行為事象と変化事象との因果関係はつながりにくい。それがゆえに、結果構文として容認された場合には、二つの事象の距離感がかえって斬新さを生み、そこに修辭性が認められるのである。そして、二つの事象の因果関係が遠ければ遠いほど、修辭的效果は高まるという図式である。

本節での最後の議論として、結果構文の修辭性を引き起こす要因を、

序節で挙げた(6)、(7)の結果構文について見ておきたい。これらについては、(5)と比較した場合に、より強い修辞性と、それに加えて(5)とは異なる修辞性の要因が感じられると既に述べた。

- (6) Sleep your wrinkles away.
- (7) Drive your engine clean.

これらの例で用いられている動詞はともに ECM 動詞である ((7)で用いられている動詞は他動詞であるが、(7)の目的語 engine は動詞 drive の項ではない)。したがって、これらの文の命題に対しては、目的をもった直接的働きかけの行為であるという読みが修正され、行為により偶発的な変化結果がもたらされるという読みが優勢になる。しかし、そのような偶発的結果を予測させるような動詞と目的語・結果述語の組み合わせでありながら、(6)、(7)の結果構文は命令形の形式で生じている。命令形は、一般的に意図された結果を伴う行為の遂行を要求する形式であり、典型的には以下のようなケースで用いられる。

- (36) Wipe the table clean.
- (37) Shake him awake.

本稿の分類でいえば、C、Dタイプであり、動詞は control 動詞である。ところが、ECM 動詞の用いられた (6)、(7)では、本来、行為者の意志ではコントロールできないはずの結果状態を、あたかも自分の意図で操作してそれを達成可能であるかのように想定する命令文の形式を取っている。ここに、これらの結果構文の特異性があり、それが際立つ修辞性を生み出す一つの要因になっていると考えられる。こうしたことから、(6)に関して言えば、単に「眠ること」と「しわが取れること」との間の因果関係の希薄さばかりでなく、偶発的結果を予測する我々の期待に反する形式の使用が加わり、より斬新な印象を与える結果構文となっている。冒頭にも触れたように、これらはそれぞれ、それを顔に塗ってしわを取ることを勧めた化粧品、そのガソリンを入れて走ることでエンジンがきれいになることを謳ったガソリンの宣伝文句であるが、このような広告文は、意味と形式面双方から生じる結果構文の修辞性を巧みに利用

したものであると言えよう。

以上、本節では、結果構文に修辭性をもたらす三つの要因を述べ、修辭性が生まれる過程を具体的に説明した。まず、ECM結果構文に関しては、形式上「動詞+目的語」の連鎖になっているものの、その動詞は目的語を選択しないECM動詞であるため、動詞と目的語の意味関係に関して、表されている行為が対象に直接的な働きかけを行うという他動性の読みからの軌道修正が起こる。このことが修辭性を生みだしていく過程の第1段階となる。次に、この軌道修正を受け以降の要素の解釈を再開した場合、動詞が表す行為事象と変化結果事象の間に心理的距離が認知されるケースがあり、この心理的距離が結果構文の修辭性に最も関わりの深い要因となる。その距離が遠い、すなわちその関連性がシナリオから導き出しにくい二つの事象では、因果関係の類推は容易ではなく、結果構文としての容認性は下がる。しかし、関連性の薄い事象を因果関係のあるものとして描くことでかえって斬新さが生まれ、修辭性は増すことになる。最後に、広告文などでは、ECM動詞の使用により行為の対象に対する意図性の欠如した事象を予測させながら、その予測を覆す命令形が用いられることがある。このように形式面での要因により修辭性が効果的に増幅するケースがあることを論じた。

以上、木原の理論では、結果構文に修辭性が生じるプロセスに関して理論の大まかな枠組みを示すにとどまっている感があったが、本稿では、その要因と過程をいくらかなりとも明晰な言葉で示すことができたのではないかと思う。

5. 結び

本稿では、英語の結果構文を従来あまり取り上げられることのなかった修辭性という観点から論じた。派生的結果構文において修辭性の生じるプロセスを論じた木原(2013)は、動詞と目的語の不一致を認識することによって別の解釈を模索し、動詞と結果事象との間の因果関係を連想・類推によって導き出し、新たに結果構文として読み込み直すプロセスが修辭であると論じた。よって、典型的ではない事象を描いた結果構文も修辭によって救われるとするものである。しかし、木原のこの分析は、理論の大まかな枠組みを提示するにとどまり、様々な要因の絡む結果構文を修辭性という一つの装置で説明する理論としてはさらなる精緻

さが必要であるのと同時に、修辞性の生じるプロセスの説明にも明晰さが求められることを指摘した。しかし、結果構文研究に修辞性という従来あまり見られなかった新たな視点を提供したという点で、興味深い研究であることは否定できない。そこで本稿では、動詞と目的語の不一致がみられる結果構文で修辞性が感じられるとする木原の基本的なスタンスに沿いながら、結果構文の修辞的效果はどのような要因で、またどのようなメカニズムで生じるのかを明晰な言葉で説明することを目指した。

まず、木原が動詞と目的語の不一致が見られるとするケースについては、結果構文の新たな再分類をすることから説明を試みた。結果述語の表す変化結果が動詞のクオリア構造の目的役割に含まれているかどうかによって結果構文の体系的分類を行った影山(2005b)をベースとし、そこに動詞の統語的情報を考慮した鈴木(2007)の視点を取り込んだ。これにより、派生的結果構文のうち、ある変化結果をもたらしそうとする動作主の意図が絡む行為を表すC、Dタイプではcontrol動詞が現れ、ここでは、典型的に動作主から対象への直接的な働きかけが行われる事象が描かれる、その一方、主にECM動詞が現れるF、Gタイプでは主語の行為目的が欠落し、対象への直接的な働きかけではなく、行為による偶発的な結果が描かれるという全体的な図式が明らかとなった。

このような再分類に基づき、結果構文に修辞性が生じる要因を探っていった。まず、動詞と目的語の不一致が見られるケースについては、ECM動詞が現れており、目的語は動詞が選択する項ではないため、動詞が対象に意図的に直接働きかけるという他動性の解釈が修正され、これが以降の結果構文としての読み込みへとつながる最初のステップであると論じた。二つ目の要因として、「主語+動詞」の表す行為事象と「目的語+結果述語」で表される結果事象との間の関連性がシナリオから導かれにくいケースでは、結果構文としての容認性は下がるものの、類推・連想によって因果関係がつながると、斬新な状況を描いた結果構文としてその修辞的效果は増すと論じた。最後に、ECM動詞が現れ、通常であれば行為による偶発的な結果の読みを予測させる命題でありながら、その予測を覆す形式を用いることで際立つ修辞的效果をねらった広告文の例を取り上げた。

本稿は、研究対象として取り上げられることの多い英語の結果構文を修辞性という新たな観点から分析してきた。修辞という概念は、その性

質上、明確な定義を拒み、それゆえ、科学的な分析にはなじみにくいものであるかもしれない。しかし、結果構文の観察から明らかなように、あるタイプの結果構文には他のタイプよりも強い修辭的效果が認められる場合や、また修辭性を引き起こす要因も明らかに他のものとは異なると思われる場合があるのも事実である。本稿はそのような我々の心理感覚の原因を明らかにし、より明晰な説明を施す試みであった。本稿を締めくくるにあたり、今後、修辭性という興味深い観点からの結果構文の科学的な研究が進展していくことを願うものである。

参考文献

- Carrier, Jill and Janet H. Randall (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives," *Linguistic Inquiry* 23, 173-234.
- 江口巧 (2012) 「否定的結果を表す結果構文—意図性の有無—」『言語科学』第47号, 35-45, 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版, 東京.
- 影山太郎 (2005a) 「結果構文・結果複合動詞の算出と解釈」『現代形態論の潮流』大石強・西原哲雄・豊島庸二 (編), 115-134, くろしお出版, 東京.
- 影山太郎 (2005b) 「辞書の知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて」『レキシコンフォーラム』No.1, 影山太郎 (編), 65-101, ひつじ書房, 東京.
- 影山太郎 (2007) 「英語結果述語の意味分類と統語構造」小野尚之 (編), 33-65.
- 木原美樹子 (2013) 「英語の結果構文における修辭的要因」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第45号, 19-24.
- 草山学 (2001) 「英語における2つのタイプの構文：迂言型と縮約型」*JELS* 18, 81-90, 日本英語学会.
- 楠見孝 (1995) 『比喩の処理過程と意味構造』風間書房, 東京.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 中村芳久 (2004) 「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」『認知文法論 II』シリーズ認知言語学入門第5巻, 中村芳久 (編), 3-49, 大修館書店, 東京.
- 西村義樹 (1998) 「行為者と使役構文」『日英語比較選書5：構文と事象構造』中右実・西村義樹, 107-203, 研究社, 東京.
- 小野尚之 (編) (2007) 『結果構文研究の新視点』ひつじ書房, 東京.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Randall, Janet H. (1982) "A Lexical Approach to Causatives," *Journal of Linguistic Research* 2, 77-105.
- 鈴木亨 (2007) 「結果構文における有界性制約を再考する」小野尚之 (編), 103-141.

都築雅子 (2007) 「ゲルマン諸語に見られる派生的結果構文に関する一考察」小野尚之 (編), 143-176.

Wechsler, Stephen (2005) "Resultatives under the 'Event-Argument Homomorphism' Model of Telicity," *The Syntax of Aspect: Deriving Thematic and Aspectual Interpretation*, ed. by Nomi Erteschik-Shir and Tova Rapoport, 255-273, Oxford University Press, Oxford.